だからこのまちで暮らしたい!!

～まちの魅力を見つける・育てる楽しみ～7

お年寄りも子どもも、しょうがいがある人もない人も、地域で一緒に

三原さん家（ち）

【団体概要】

三原さん家は、福岡県久留米市安武町にある三原圭子（73）さんの自宅。のどかな農村地域で、高齢者が多い地域でもある。三原さん家は、宅老所や小規模多機能の看板を掲げているわけではないが、近所の高齢者の集いの場や、しょうがいのある方の住まいの場にもなっている。

現在、社会福祉法人 拓くと相談しながら、日中、お年寄りも子どももしょうがいがある方もない方も、誰でも集える居場所づくりをするために、敷地内の倉庫を改装中。

三原さん家のご近所にある『社会福祉法人 拓く』主催のセミナーに参加した翌日、常務理事の馬場篤子さんのご案内で、三原さん家にうかがった。

三原さん家は、「宅老所・小規模多機能ケア白書2009」（宅老所・グループ全国ネットワーク・小規模多機能ホーム研究会・地域共生ケア研究会編）でも紹介されているが、ここでは三原さんの魅力にも迫りたい。

（CLC東日本　二瓶貴子）

ラジオ体操からの出発

三原さんは、４年前から４人の仲間とラジオ体操をしていた。夏休みをきっかけに、「朝のラジオ体操をうちの庭で一緒にしませんか」と、ご近所の子どもたちのいる家庭を中心に呼びかけた。しかし、残念ながら、子どもたちは集まらなかった。

そこで「昔の子どもたち」（三原さんと同世代の方や年上の方）にチラシを配ったり、直接声をかけたりして呼びかけた。すると、16人が集まり、毎朝6：30からラジオ体操をするようになった。

そんなおり、三原さんは、市長と話す機会があり、このラジオ体操のことを話し、「お金がなくても体力づくりができるのでは」と話したところ、市長が賛同し、健康づくり推進の施策となり、10人以上市民が集まれば、ラジオ体操の音楽を録音されたテープとラジオがもらえるようになった。三原さんはその場だけの関係でなく、体操を休む方がいれば、「風邪ひいたのかな？」「どこかに出かけたのかな」と心配になり、誰かが家を訪れたりして、様子を見にうかがったりと助け合いの関係を深めている。

ラジオ体操の終わったあとは、お茶を飲んでほっと一息。ここで笑いながら話をすることが、三原さんを含め皆さんの楽しみとなっている。

支え合うことは自然なこと

三原さんは、地域でお互いに支え合うことは、とても自然で当たり前のことだと思っている。「まずは、向こう三軒両隣からよね」と三原さん。「向こう三軒両隣」から「ラジオ体操仲間」へ、「料理教室」「手芸教室」「ゲートボール」「コープ商品の共同購入」など、

少しずつ地域の支え合いが広がっている。

三原さん家の近くには、しょうがい者が地域で幸せな人生を送るということを目指して設立されている『社会福祉法人 拓く（多機能事業所出会いの場ポレポレ）』がある。三原さんは、社会福祉法人拓くの後援会「ポレポレ倶楽部」の副会長も務めている。

イベントの企画・運営のサポートをしたり、地域とポレポレをつないでいく役割を自然と担っている。「三原さんが人を集めてポレポレに連れてきてくれる。三原さん家にも人が集まってくるのよ」と、社会福祉法人拓くの常務理事の馬場篤子（54）さんは言う。

ある日、ポレポレに通っている知的しょうがいのある女性のお父さんが病気で入院してしまい、ひとり暮らしになるので心配だと、馬場さんが話すのを聞いて、三原さんは、「じゃあ、うちに下宿したらいいじゃない」と提案し、その女性に自宅の一室を提供し、一緒に暮らして、もう２年になる。「家族の一員と思って暮らしている」と三原さんは語る。他人でも家族のように支え合って生きていく、という思いのベースには、昔料亭を経営していた頃、住み込み従業員など他人と暮らし、補い合っていくことのたいせつさを身にしみて感じた経験があるからだという。

また、「今日は一人でご飯を食べるのが寂しい」という人がいれば、三原さんが「うちで一緒に食べたら」と声をかけ、一緒に食卓を囲んでいる。それだけではない。日中お年寄りも子どもも、しょうがいがある方もない方も、誰でも集える居場所づくりをするために、社会福祉法人拓くと相談しながら、三原さんの自宅の敷地内にある空き倉庫を改造している。きっかけは、熊本県植木町にある地域交流サロン「ばあちゃんち」(13頁参照)を見学したことだ。

三原さん宅の倉庫を改造すると、コミュニティルームや多目的室、居室が３部屋、お風呂もできる。完成後には、現在、三原さん家に下宿している女性もそこに住む予定。改造中の倉庫を案内しながら、馬場さんは、「ここにベッドを置くでしょう、ここには……」とイメージを膨らませながら、「普通の人にしてみれば“特別”と思うことも、三原さんは“自然”なのよ」と笑う。

三原さん家は、安武保育園の園児の散歩の通り道にもなっている。今後は、通るだけではなくて、コミュニティルームに立ち寄って、子どもたちと高齢者やしょうがい者、近所の皆さんと一緒に過ごせる時間ができればいいなとみんな思っている。

今までもこれからも

実は、ポレポレ倶楽部副会長として、また地域住民としてのポレポレへのサポートは、三原さんの活動の「ごく一部」なのだと馬場さんから教えてもらい、また驚いた。

馬場さんは、「“やってます!!”という感じを表に出さず、さりげなくやっているところが三原さんの魅力なのよ」と言う。よくよく聞くと、教育・食育・環境・地域福祉計画・女性で結成される防火クラブなど、さまざまな分野で活動されているのだ。

でも、三原さんは控えめだ。「半分いい加減がいいのよ」と笑う。あまり気負わないで、できることからということなのだろう。ポレポレで開催されるバザーの品物を三原さん自身もつくるのだが、三原さんの呼びかけで、お友だちもつくってくれるそうだ。ちょうど私たちがお邪魔している時に、三原さんのお友だちが来て、「箸袋をつくってみたけど、こんな感じでいい？」と三原さんに尋ねる場面に遭遇した。三原さんが「大丈夫、大丈夫！」と明るく言うと、訪ねてきたお友だちは「そう？」とうれしそうに笑っていらした。

馬場さんは、「三原さんは、いい意味で人を使うのが上手。あの調子で三原さんは人をつなぐの」「行動力があって、することが早いの」と言う。

三原圭子さん

馬場篤子さん

「今、三原さんが力を入れていることは何ですか？」とうかがうと、「防火クラブかな」。地域の女性で構成される防火クラブ。火事の時、直接消火にあたるのではなく、その前の段階「わが家から火を出さない」ことに力を注いでいる。防火クラブとして活動をするために、福岡県の消防学校へ１日体験入学をした。三原さんはその第一期生。現在は18期生までに達している。この消防学校１日体験入学、「女性が参加しているのは久留米市だけなのよ」とのこと。三原さんは、防火クラブや「ふれあいの会」の活動をとおして、自分たちが住む地域のどこに誰がいるかを把握している。

実際に三原さんは、近所に火災があった時、消火にあたる消防署や消防団に連絡し、三原さん自身も、消火器２つをもって104歳のおばあちゃんを救出したのだ。そのほかにも「エコ活動」に取り組んでおり、「マイ箸」「マイバッグ」「生ごみのリサイクル」など、地域の仲間を巻き込んで多面的な活動をしている。昨年、三原さんは暮らしに密着しているのは女性、その女性の活躍の場である「女性の会」を校区で立ち上げた。いろいろな活動を地域の仲間としていくことで、地域で取り残されていく人がいないようにしているのだ。お年寄りも子どもも、障がいの人もない人も、垣根や壁をつくることなく、一緒に地域で暮らし続けることをとても大切にして、それを実現していくために、三原さんは、今日も笑顔で積極的に活動している。

DATA

三原さん家

連絡先：社会福祉法人 拓く 出会いの場ポレポレ
〒830-0071
久留米市安武町武島468-2
TEL：0942-27-2093
FAX：0942-27-2086
ホームページ：http://www.h-people.com
メールアドレス：h-polepole@ktarn.or.jp